

がんチーム医療における薬剤師への期待：医師の立場から

国立がんセンター東病院・大津 敦

がんの薬物療法は近年大きく変貌している。有効新薬の導入による大幅な生存期間の延長や術前後の補助療法として治癒率の向上などのエビデンスが多数報告され、薬物療法は大部分のがん治療において必須の治療法としての地位を確立している。一方で、多数の新規薬剤の導入により治療法は複雑化しており、特に分子標的治療薬は従来の薬剤と異なり幅広い内科的な知識が要求されるなどがん薬物療法にかかわる医療者にも高い専門性が要求される時代へと変化している。現在のがん治療は施設全体での総力戦である。各種診断部門をはじめ、外科、内科、放射線科、緩和医療科など臨床各科の横断的な協力が必須であり、さらに患者を中心として、医師とともに薬剤師、看護師、検査技師、ソーシャルワーカーなどのパラメディカルスタッフを含んだチーム医療が重要である。薬剤師はその中心的な役割が期待される。具体的には、投与レジメンの登録とその管理、副作用対策など支持療法の統一化、投与時の安全管理（投与量、スケジュール、薬物相互作用のチェックなど）、正確な調剤、服薬指導、治療後の副作用への対応、合併症などへの処方医師への助言などがあげられる。当院では国立病院では初の通院治療部が設置され、各診療科医師、専任薬剤師・看護師、CRC、ソーシャルワーカーの参加によるミーティングを2週に1度開催し、運用上の様々な問題点を検討し、薬剤師がその中心を担っている。

がん薬物療法はいかにその最大限の効果を保ちながら毒性の軽減を図れるかが大きなポイントである。使用法を誤れば致死的な毒性を引き起こす。各薬剤の薬物動態や薬物相互作用などにも十分精通する必要がある。がんの病態は複雑な場合が多く、実臨床での効果や副作用発現には多数の因子が複合的に絡み合うため、TDMが確立された事例はほとんどない。臨床的に例えば肝・腎機能障害を有する症例は多数存在するが、適切な用量調節法も確立されておらず、むしろ患者のPSや経口摂取状態、排泄径路の障害などで毒性の発現が大きく変わる。すなわち、患者を診なければ実際の治療レジメン選択や投与量の設定に関する踏み込んだ議論はできない。がん薬物療法専門薬剤師にはより一段踏み込んで患者と向き合う診療の場に積極的に関与し、高い専門性を持って医師や看護師とともにチーム医療のレベルの向上に貢献することを期待している。